

II
—
9

総括討論

伊東俊太郎・サウイトリ・ウイシュワナタン

(議長 上山春平)

報告 伊東俊太郎

ふつつかではございますが、総括の任を引き受けさせていただきます。

ところで、この総括というのをどういうふうにやったらいいかということを書いたのも考えたのですけれど、各発表のサマリーをつなぎ合わせるといふようなことは一番よろしくないのではないかと。すべて発表がなされて、皆さん既に内容をご承知なので、これは単なる繰り返しのお話になりますね。それから、私のそれぞれのご発表に対する印象を並べ立てるといふのも、何しろ内容が多岐にわたりますから、しまりのないものになってしまうような気がします。

そこで、いつそのことや異例かも知れませんが、次のように考えたわけです。この三日間なされてきた発表や討論を踏まえた上で、私自身の考え方で反応を述べさせていただきます、そういう私の主体的な反応によって一つの問題提起的で、やや挑発的でもある総括をするほうが、議論が活発になっていいのではないかと。つまり、今度は私の方がまな板の上の鯉になって、皆さんにいろいろ意見を云って頂いたほうが、単に儀礼的な、羅列的な総括よりも、これからの日本研究、もっと広くいつ文化研究を考えてゆく場合の何かの素材にしたいだけなのではなからうかと思うのです。

それで、そういう種類の総括をやらせて頂くことにして、

どういう論点に中心にしようかと思ったのですが、それに付いてはやはり本年度のシンポジウムのテーマということを考えて、つまりそれは「日本研究の対象と方法」ということでございましたね。初年度の「日本研究のパラダイム」に対して、二年度は「日本研究の対象と方法」をやるということでありましたので、そこに戻しまして、特に「方法」という問題に引っかけ、三点ないし四点ぐらいのことについて集中して述べさせていただきたいと思っています。これは、日本文化の研究手法というよりも、文化研究一般に通用する普遍的なことにもなるだろうと思うのですが、その際しばしば見落とされてきたと思われることがあるので、そういう点に注目して考えてみたいと思います。これから何々と何々というふうないくつかのパール・ベグリフ、ペア・コンセプト（対概念）を出してきて、この二つのものの正しい関係というものがどういうものなのか、ということ考察することで、方法的に統一してみたいと思います。

ところでこの報告においては敬称も「さん」で統一させていただきます。「先生」というべきかも知れませんが、率直な討論の場ということで、親しみをこめて「さん」に統一させていただきますので、何卒ご了承下さい。

まず第一にとり上げたいのは、自国研究と異国研究との関係です。このことは最初のファン・ブレイメンさんの報告に

示唆されて申し上げるのです。ファン・ブレーメンさんは、文化人類学という領域の中で、日本人の研究と外国人の研究ということに触れられて、それを非常に詳しくお話しくださったので、それは非常に興味深い、よく調べられた研究であると思います。しかし問題は、それらが、こともなげに同じ平面に並べられていたような気がするのです。

つまり、自国研究と異国研究とは、役割や特徴や長所——それぞれ短所も持っているのですが——といったものが違うのではないだろうか。はたして、この二つのものは、全く同じ機能をもつものなのだろうかという感じが率直にしたわけです。これから申し上げことは、恐らくファン・ブレーメンさんも先刻ご承知なのかもしれませんが、ちょっとこの問題を掘り下げてみたいと思います。

そのためには、まずいくつかの神話を取り除いておこうと思います。それは僕にとつて神話なんです、皆さんにとつてもそうであれば幸いなんです。

まず、自分の国のことはその国に属している自分が一番よくわかる、これはまったくの神話だと思います。確かに言葉について、資料については日本人が日本について研究したほうが有利であることは疑い得ません。しかし、研究というのは、言葉がわかり、資料があればよいというものではありません。もっと重要なことは問題意識だと思うのです。どん

な問題を発見するか、そして、問題が発見されれば、それをどういうふうに解きほぐしていくかということが大切なのであって、言葉や資料は研究の必要条件であっても、十分条件ではない。

我々日本人には自分たちの文化、日本文化に慣れ親しんでいるが故にかえって見えないもの、見えない問題があるわけです。外国の研究者が、ある距離をもって、外から見ることによつて新たに発見され、認識される日本研究の問題というものも大いにあると思うのです。外から見た外国の人が日本について新しい問題提起をして、それに我々がハッとさせられる。つまり、思つてもみないことが、外から見ることによつて光が当てられるということがあるだろうと思うのです。

去年の記念講演の冒頭でレヴィ・ストロースさんは、文化を内から研究するのはその文化に属している人の特権であるという話から始めたと思います。それはある意味では正しいのですが、しかし、その文化に属さないで、もう一つの異つた文化に属して、外から日本文化を研究するということは、それと同じぐらい価値のある特権だと思うのです。もちろん特権の意味が違ふのです。そのことが重要なんです、それは異つた意味で、内からの研究と同じぐらい重要な特権を持つておられると思います。日本人にとっては自明なものが、その外国の研究者には自明ではないが故に、その問題に対し

て敏感になるわけです。我々が慣れ親しんでつい見落としてしまう問題に非常に敏感になり得る。そしてそこに新しい発見がなされる。そういう意義を外国からの日本研究は持っているのではないでしょうか。

ですから、私が申し上げたいのは、日本人の日本研究と外国人の日本研究を全く同じ機能をもつもののように考えてしまうことは、あまり生産的ではないように思うのです。ヴィシュワナタンさんが、ファン・ブレーメンさんの発表が終わった時に、もう外国人が日本人の研究によりかかって、それを土台として研究をやる時代ではないのではないかというコメントをされましたが、私は賛成であります。もちろん、自分の研究する事柄に対する情報をできるだけたくさん集め、的確に理解する、これは非常に大切なのですけれども、何もかも日本人と同じにやっては、かえって外からする日本研究の特権をなくしてしまうのではないのでしょうか。

厳さんの発表は、中国から見た日本ということを通して、我々に見えなかった日本というものを鮮やかに見せてくれたと思うのです。それは単に歴史的にはなくて、これから日本人がどのように中国の人とまじわっていかなければならぬのか。このことは同時に、中国の人はどのように日本人とつき合うべきかということです、このことの示唆をも含んだ、未来をも含んだ、そういう射程の研究をなされたと思う

のです。我々は新しい目を開かされたのですが、それは正に、中国から見た日本という新しい視座が日本研究に新しい光を当てていると申し上げてよいと思うのです。

自国研究と他国研究とはどちらが上とか下とかいう問題ではなくて、これはある意味で次元が違うと思うのです。ですから、平面に対してもう一次元別の次元が加わって、そうして日本研究が立体的になるのです。内からも外からも両方から、日本文化や文明が持つものを違った側面から長所を生かしながら補足し合う相補的なものであると考えるわけです。

これは外国の方の日本研究のみならず、我々の外国研究についてもいえるわけでありまして、例えば我々のヨーロッパ研究も——私もヨーロッパの研究をしておりますが——昔はヨーロッパの人と同じようにやるのが理想だった時代があるのです。そして、身も心もそちらに捧げてやっていたのです。しかしそれはあまり実りあるものではありませんでした。その人自身にとって不毛であるばかりではなく、相手の国の人にとってもあまり益するところがないのです。そんなことはその国の人が十分やれるのです。で、私はいまヨーロッパから少し出て、アラビアとの比較という視点から、距離をもつて、ヨーロッパを見ているのですが、そうすると、また違ったヨーロッパが見えてくる。これを私がやった場合には、成功すればですが、ヨーロッパの人の自己認識にも役立ち、

また私自身も創造的な研究だという自覚を持つことができるわけです。

日本人研究者と外国人の研究者とはメリットとデメリットを持っているのです。それ故にこそ対話をしなければいけないのです。両者のメリットを交換し合うことが重要なのだらうと思います。

これが第一点でございます。

第二点は、「伝統と近代化」というベア・コンセプト、パール・ベグリフについての話でございます。

この問題は中岡さんの発表にもっとも関係しているかと思えます。中岡さんの発表は非常にももしろかったと思います。えてして伝統と近代化は相反するもので、一方が成り立てば、他方は成り立たない。近代化は伝統を破壊するものであり、伝統は近代化を疎外するといった相互矛盾的な関係でとらえられていたのですか、日本の場合はそうではなくて、日本の近代化はまさに伝統の上に立って遂行されていたということなのです。

さて、この問題を例えば英国の産業革命に適用してみる。産業革命は一つの大きな変革、近代化の最初の先駆者だったのですが、それだって意外と、それをなし遂げた時には、英国の伝統的な技術と結びつかなかったかどうか。これはリンダ・グローブさんがちよっとおっしゃったと思います。それ

がなかったかどうか考えてみる機縁を与える。

つまり、日本研究を日本だけに閉じ込めないで、ほかの文化研究における既成概念にも光を当てる知的装置にしてみるのもいいのではないか。

さらに中岡さんは、日本は発展途上国の近代化とその点で違う、発展途上国の場合には巨大な落差があって、伝統と近代化が結びつきえないと、メキシコの例など挙げてこうおっしゃったわけです。

そうかもしれないけれども、僕はそういつてしまったら身もふたもない話になると思うのです。そうすると、中岡さんのせっかくいい話がある日本のサクセス・ストーリーになってしまふ。そうではなくて、発展途上国も意外と今後伝統に基づいた近代化をやるかもしれないという可能性を残している。現に韓国はもうそれをやりつつあるのではないだろうか。韓国の近代化の問題は、韓国の伝統を捨ててはいないと思います。韓国でも始まっているし、東南アジアでも始まるかもしれない。そう考えたほうが日本の経験が生きるのではないだろうか。つまり、日本の研究がほかのところの研究にも役立つというか、そういうことをはっきり指摘した中岡さんの研究を外国の人、例えば中国の人が読むと、「ああそうか。我々も伝統に基づいて近代化ができるのだな」と。そうすると、近代化のためには伝統をつぶさなければならぬ、伝統を維

持するためには近代化を否定しなければならぬ——これは文化大革命だったかもしれません——という思い込みが取り除かれて、伝統も生かしつつ近代化するという歩みが中国で始まるかもしれない。そっちのほうに僕は希望をつなぎたい。日本研究は単に日本のためだけにあるのではないんです。これは世界史を事例研究なので、ほかのところにも参考になるはずです。これを生かせるなら生かしてもらうこと、こちらのほうに話をもっていったほうが生産的であると思うわけです。

このことが含むのは、近代化というものが一樣なものではなく、それぞれの文化の伝統に上においてなされるものであるならば、それは多様な形をとるであろうということです。つまりそれぞれの文化に見合った近代化が可能になるでしょう。これは西欧一元の近代化よりもはるかに豊富な内容を持っているはずです。そして、それはまさに日本研究を通して比較研究の途が広がって、日本研究が単に日本の事例として日本列島に閉じこめられるのではなく、何か他の世界の問題にも役立つヒントになり得るかも知れないと思うのです。村上さんはきょう、後発型の近代化ということを問題にされて、このことに具体的に触れられたと思います、そういうことがあるだろうと思います。

これが第二点でございます。

第三点は、「伝統と革新」という対概念の問題であります。この問題もこのシンポジウムでいろんな方が陰に陽に触れた問題だったと思います。これをもっとも正面から取り扱ったのは久野さんの発表でありまして、この問題は「伝統と近代化」という問題と結びつくのですが、もっとアイデオロジカルな領域、思想のレベルに引き上げて、この「伝統と革新」の問題として取り上げられたわけです。

その一番最初に、「伝統なくして変革はなく、変革を経験せぬ伝統はない」という言葉から久野さんは始められたと思います。そして最後には「伝統は古くはないが、古いものから来るのである」というふうにいわれた。この意味を少し考えてみたいと思うのです。あるいは、きょうの上野さんの話の、伝統的な文化項目はその置かれているコンテクストに応じてその機能を果たしているというのも、まったく違った文脈からだったのですが、このことに関係があると思います。

通常、「伝統と変革」というこの対概念は、これも対立的にとらえられております。あれかこれかでとらえられているのです。変革は伝統を否定するし、伝統は変革を受けつけない、こう考えやすいのですが、久野さんが非常によく分析されたように、変革の中には常に伝統がひそんでおり、伝統は常に変革を内蔵していたのです。これは日本だけのことではないと思うのです。世界のどこの文化の発展もそういう形をと

ったと思うのです。

日本の文化でいえば、縄文があり、農耕文化がはいって弥生になり、朝鮮や中国から東アジアの文明が日本にはいつてきて、さらに西欧の文明が近代にはいつてくることによって、日本は目まぐるしく変わりました。しかし、中国文化を入れたからといって、日本文化は中国文化になったわけではありません。西欧文明を入れたからといって、日本が西欧文明のものになったわけではありません。それらの変革を通して日本はやはり日本なんです。日本というアイデンティティを持ち続けているのです。

ヨーロッパでも同じで、ヨーロッパには一番古いところではケルトの問題がありますが、ついでゲルマン、さらにはギリシャやローマの文化を取り入れる。またイスラムの文化を取り入れる。そのたびにヨーロッパは目まぐるしく変わりました。変わったからといって、例えばイスラム文明を入れたからといって、ヨーロッパ文明はイスラム文明になったわけではない。ヨーロッパはやはりヨーロッパなんです。そういうものを取り入れて、ヨーロッパはみずからのアイデンティティをむしろ豊富にしたといってもいいと思うのです。それほどこのものもそうだと思うのです。

ここで「土着と外来」という問題に引っかけてこれをいうと、ある文化現象なり要素が、「これは土着のものである」と

いう人がいるかと思うと、「いや、これは土着ではなくて、外来のものだ」という。要するに自生論者と影響論者の対立。土着論者と影響論者が水と油のように争ってきた。しかし、これは美に不毛な争いだっと思うのです。土着のものは外来のものによって変化するのですが、しかし土着のものによって同化していくわけです。ですから、文化の同一性というのは影響を排除しての同一性ではないのです。

ここで私はこういう概念を出したい。つまり、具体的に存在している文化の同一性というのは、実のところ、「影響を受けた同一性」なのだ。これは一見矛盾している。しかしこれが現実なんだと僕は思います。現実にあるのはこれなんです。純粹な土着が土着だけであるなんてことはありません。純粹な影響が影響だけとしてある、こんなこともないのです。しかし、この現実の実体が見失われて、ナシヨナリストは「土着、土着」といったがり、影響論者は「外へ外へ」もっていきたいというところでやるのですが、もしも「影響を受けた同一性」ということを考えれば、自己の文化のアイデンティティを失うことなく、他から影響の研究もとらわれない態度でやっていける。

「土着と外来」といったこの不幸な二者択一を文化研究は捨て去るべきで、もっと開かれた、他文化との関連において自文化の独自の発展を考えていくことが必要だと思うのです。

きょう柳宗悦の話がちよっと出てきて、上垣外さんだったか、駒場の民芸博物館の人たちは、柳宗悦がウィリアム・モリスの影響を受けたというのを否定したがるという話があったけれども、影響を受けたことを率直に認めていいのではないか。影響を受けたって、私は柳宗悦はウィリアム・モリスと全く同じだとは思いません。やはり柳宗悦は日本の文脈でそれを受けとめているのでしょうか。そして日本の文脈の中で生産的なことをしているのです。それはよいことではないでしょうか。何かの影響を受けたというと独自性がなくなってしまうように俱れ、影響論者と土着論者が、不幸に排斥し合っていて、風通しが悪くて真実が見えてこないということがあります。

「影響を受けた同一性」という考え方に立てば、いろいろな文化を孤立させずに、その影響関係を開かれた態度でどんな研究をおし進めていって、しかも自己の文化の固有の性格の認識を失うことがないということが可能であるばかりでなく、そのことがなされなければならぬのであり、また現実にもそうであったと思うのです。

これが第三点です。

第四点。これが最後になりますが、「文化と文明」という対概念の問題です。「文化と文明」の問題は容さんの発表の中で非常に重要な役割を果たしましたし、きょうの村上さんのお

話でも、あからさまにはいわれなかったかもしれないけれど、潜在的には重要な問題になっているはずであります。

私は容さんの研究も非常におもしろかった。これは皆さんも同意するところだと思います。容さんが日本のある一つの思想状況の変換といった意味で文明思想と文化思想ということを取り上げて、この交代を論ぜられたのですが、そのこと自身はもういろんな人が指摘していることですが、容さんのいいところは、それをアジア全体の視野の中に入れて日本の変動を位置づけた。そこに大きなメリットがあったと思うのです。

しかし、そこで扱われたのは、容さんもお認めになるだろうけれども、文化思想と文明思想で、文化や文明そのものではない。つまり、文化思想の中にはいった時、そこでは文明は日本からなくなってしまうたのか。そんなことはない。上垣外さんが、あの時代にちようどアジア全体で文明的交流が非常に行われたことを中岡さんが指摘していたではないかということをいっていたと思うけれども。

だから、文化と文明というものはいつでも併存していると思うのです。私は文化と文明をただ単に対立的には考えないわけです。先ほど相補的ということを申しましたが、伝統と革新もそうですが、文化と文明も排他的なものじゃないと思うのです。相補的なものなんです。そういう見地に立つてま

とめてみたいと思います。しかしこれを詳しく申し上げますと時間が足りなくなってしまう。したがって簡単に申し上げますが、舌足らずのところはご勘弁下さい。

まず、文化が発達してある程度のところへ行くと文明になります。まずこれは私は認めるのですが、「ではどういう段階で文明になるのですか」という問がすぐはね返ってきますが、これもきょうは詳しくお話しいたしません。私は「都市革命」という段階でそれが来ると思っています。とにかくそれを認めていただいてその後文明が形成された場合、文化と文明の関係はどうなるか。文明が成立したら文化がなくなってしまうわけではないんです。文明と文化は併存してあるのですが、その併存の仕方はどういうことになるのかということになります。

スラジャヤさんがきょうはお見えにならないけれども、皆さんのご発表に対して梅棹忠夫さんの文明概念を出されて質問されましたね。そこではそのままになってしまったけれど、それをもうちょっと発展させてみたいのです。そのためには図示した方がよいでしょう。ここに一つの球があります。ある文化圏に属する人間の生活様式がこのような球であらわされたとしましょう。この球は文化圏にそれぞれあるわけですからそれは一つの内核を持っているんです。そこにはその文化のエートスともいべきものがあるのです。エートスのほかに、

根源的な価値感情みたいなもの、それから、物の考え方のもことになるような観念形態といっておきましようか。これらを文化と名づけておきます。

そして、その周りに外核、それが梅棹さんがいつている制度です。それから装置や組織。経済組織や社会組織もそうだけれども、それが文明なんです。

梅棹さんは、文明とは制度であり、装置であるとされ、これが内核の文化に影響を及ぼすとお考えになっておられます。この面もたしかにあります。外核の文明そのものが内核の文化によって養われ、それが装置や制度を生んでいくという面もあります。この文化のエートスに見合ったものが外的な制度や組織をつくり上げていくわけです。

私のいいたいポイントは、それにもかかわらず、いったん装置や制度や組織ができると、それはこの文化の内核から相対的に独立してくるということなんです。ですから、文明の装置はこの文化エートスを離れて移転できるわけです。日本が近代化したといわれた時、日本は近代の西欧文明を取り入れ、西欧の社会組織やいろんな装置を取り入れたのです。

ところが、ここで対話が始まるわけです。日本にずっとあった固有文化と外来の文明が対話を始めるわけです。バラバラにあるわけではないんです。そうすると、これがだんだん変わっていったって、日本独特の文明形態をとってくる。

例を挙げましょう。例えば資本主義制度がはいってくる。

そうすると、日本に資本主義経済というような形態がはいってくる。また近代科学をとってみましょう。近代科学は文化でしょうか、文明でしょうか。科学は普通文化のエートスに関わるのじゃないかと思われるかもしれませんが、しかし、そうともいえない。一七世紀に西欧人が近代科学をつくった時は、確かにその当時のヨーロッパの知的エートスが近代科学を生み出したが、それが一たん制度化され、装置化され、組織となると、それは文明となってほかのところにはいっていくわけです。日本は西欧近代科学の制度を取り入れたのであって、必ずしもエートスを取り入れたわけじゃありません。ところで、こうしたものが外から入ってきて、日本のエートスと、相互作用を起すと日本独特なものができると、その文明形態がほかのところへ移転可能になります。例として日本の経営法を挙げてみましょう。日本の経営法というのは、日本人のエートスが生んだ一つの文明的の装置なんです。ですから、これは例えばアメリカに移植できるわけです。現にある面では移植されつつあります。そうするとどういうことになるか、アメリカでは移植された日本の経営法をアメリカ的のエートスで運用するのだと思います。エートスまで全く日本のものになる必要はなく、また、なりえないのではないのでしょうか。

それでいいと私は思うのです。それがアメリカに渡って、その地の仕方であまり運用できれば、それはアメリカはうまくいったわけですから、これは非常に幸福な文明の交換が行われたということになるわけです。

文明というものは外に向かっています。外に向かっている、それぞれの文明的な装置がだんだんすり合わされて、グローバル・シビリゼーション地球文明というのがだんだん形成されるだろうと思います。

文明装置のすり合わせといったんだけど、例えばいま日本が問題になっている貿易摩擦で考えてみると、貿易摩擦は文化摩擦だといわれることがあるのです。つまり、貿易摩擦というのは文化の軋轢なんだと。ですから、極端にいうと、日本の文化をアメリカの文化にしなければ貿易摩擦は解消しないと。極端な場合は「日本語がけしからん。これが障壁の最たるものだ」と。これは乱暴な意見で、そういうのには私はとてもついてゆけない。

そうではなくて、貿易摩擦は装置と装置の、文明と文明との出会いなんですよ。だからそれはすり合わせて修正することができると。文化を変えることなく文明のすり合わせができると思います。例えば関税障壁の問題をどうするか、法律を変えるとか何とかということは、みなこの種の問題ですね。こうした問題をグローバルなシステムを構成するために

再調整していくことは、なにも文化を同じにしくなくたっていいでしょう。文化を同じにしくちゃいけないというのだつたら、日本文化がアメリカ文化になるか、アメリカ文化が日本文化にならないうちは経済摩擦は解消しないということになるんです。これは非常に不幸な結論です。そうではなく、それぞれの文化は自分の文化を維持しながら、外に向かって文明のすり合わせをうまく調和的にやっていくことが大切なのではないでしょうか。

ですから、このモデルはこういう結論になります。我々はそれぞれの文化を保持しながら、一様化することなく——これを一様化することは不可能だと思います——文明の装置をすり合わせ、地球的な文明の時代に行くことができるということであって、これはこれからの地球時代に適切なモデルじゃないかと私自身は思っているわけなのですが、いかがなものでしょうか。

そういうふう文明と文化を考え直してみることによって、いま問題になっているいろんな軋轢、対立、隘路といわれているものを突破していく手だてに、できるのではないかと考えております。

時間が来たので、この辺でやめるべきだと思うのですが、あと一言だけ。これをいわないとちょっと誤解をまねくかと思ひますので。それでは文明と文明とはすり合せてゆけるが、

文化と文化とは交流できないのかと。そんなことはありません。それも交流できるし、現に交流しているのです。

この文化とこの文化はそれぞれ独自なものです。でも、日本文化にいる私は、例えばヨーロッパ文化を理解できるので、私はヨーロッパ人になれませんが、しかしそれを私なりに理解できるのです。例えば私はイタリアのフィレンツェへ行つて、サンタ・マリア・デイ・フィオレの美しさがわかるのです。法隆寺も美しいと思うけれど、サンタ・マリア・デイ・フィオレも美しいと思うんです。「では、おまえは、イタリア人と同じようにそれがわかっているのか」といわれたら、確認のしようのないことになるけれども、やっぱりそれが美しいと思うのはイタリア人も日本人も同じ人間だということに結局行きつくくんだろうと思うのです。

また例えばタイラーさんが日本の謡曲を研究される。そうすると、それは自分にとってエンライトンメントだったと云われる。それが日本人と同じゲニーセンの仕方においてかどうかは別として、それは謡曲が日本人だけの経験の領域を突破して、より広い人類の理解の中に広がっていくことなので、こんないいことはないんじゃないか。

だから、文化は一つにはならないと思うけれども、異文化の間にも「人間性」ともいうべきものが通底しており、それによって互に理解と享受の地平を拡張合えるのだと思ひます。

最後のところは、駆け足になりましたが、ヴィシユワナタンのさんのご報告に譲りたいと思います。ありがとうございました。

報告 サヴィトリ・ヴィシユワナタン

伊東先生は一五日から行われたいろいろな報告やペーパー、またディスカッションをもとにしてご感想を述べられましたが、私はその前に私たちが参加した一三日のことも入れて少し述べさせていただきます。

もちろん、私は一つ一つのペーパーについて詳しくコメントすることもないけれども、伊東先生のほうからもういろいろご指摘がありまして、私の名前も出ましたし、日本語も不十分でいろいろな誤解もありましたから、その誤解も解いておきたいと思っています。

私がこの会議に呼ばれ、もちろん皆さんが日本語で話していただきましたし、私もなんとか下手な日本語で話していますが、つくづく感じたことは、日本研究に携わっている外国人の日本研究家がいかにも日本語が上手かということです。だから、インドにおける日本研究が本当に国際的に認められるようになるために一番大切なことは、日本語で物をいう力を持ったな

ければならないということです。もちろん、私が日本研究を始めた時、日本語に重点を置いたし、日本語を読み書きするだけではなくて、話すことにも力を置かなければならないと分かるようになりました。日本人と話をしたいなら日本語でしないと対話が生れないと分かったからです。また、皆さんの日本語にすごく感心し、感動もしましたから、それも一言いっておきたいのです。

一三日のいろいろの報告で、世界中といわなくても、ここに集まっているいろいろな国々の日本研究のいまの状態、事情もわかりましたが、同時に、日本研究に携わる時に出てくる苦勞、またいろいろな問題は国別に違うけれども、それも理解するようになりまして、大変勉強になりました。自分のことばかり考えていると、あまりにも苦勞が多すぎるような感じがすることは普通ですが、他人の苦勞を聞く時、自分がどれほど恵まれているかということもわかるし、日本研究の場合にもそれを感じるようになったことを非常にありがたく思っています。

いろいろな外国で行われる研究によってたくさん示唆も得ました。これから日本研究をどのように進めていけばいいかということにも示唆を受けたし、インドにおける日本研究にはどのような欠点があるか、あるいはどのような短所があるかということもわかるようになりました。

伊東先生はセッションについていろいろご発言をされまして、私のコメントも取り上げられましたから、少し話させていただきます。私は日本人と共同研究をやったほうがいいと申し上げたのは、べつに日本人と同じ考え方を持って、同じ見方を持って研究するというものではなかったです。私が言うおうとしたのは、特にインドで私が日本について勉強しようと思う時、日本語の資料の不足、日本で行われているいろいろな研究のアプローチとか、新しい問題、そういうことはあまりわからないし、どんなに日本語が読めるとしても、日本人の速度で読めないという苦しみ。また衛藤藩吉先生も日本語はむずかしいということを認めてくださいましたが、日本人には外国人の研究の苦労はわからないかもしれません。例えば、資料があっても、それを読むには時間がかかる。その時間がない。どうすればいいのか。わかりません。資料の選択。いろいろの問題があるから、そこは、日本人と一緒になったら、もっと研究成果が上がるのではないかということが私の指摘だったのです。

もう一つは、自分の見方を無視して日本人の見方にたっただけ研究するつもりではありません。少しインド人的主張をしています。誤解をなさらないようにおねがいたします。私はこのセンターにお願いしたいのは、外国人との共同研究の場合は、かならずしも日本人の見方を押つけないように

すること。というのは日本文明論だけに陥らないように努力すること。

また最初のあいさつで「日本中心」にならないようにと述べましたが、それは日本以外の他国の研究をやっていたきたいという提案ではなかったのです。

伊東先生のご発言に出た対話の必要性。私は日本研究を通してインド人として日本人と対話を持ちたいのです。対話というのも、一人が他人に自分の意見を押しつけるということではなくて、お互いの意見の交流、その交流によって共同目標のある真実を探すというか、追求する。

ここで私の個人の経験をいわせていただきたいのです。私が留学した時、この場でお名前を出してもよろしいと思いますが、一番励ましをいただいたのは丸山真男先生です。その時私は外交史をやっていました、同じ専門ではないとわかりながら、私の日本語が不十分だったとわかりながら一生懸命に私のいうことを聞き、また自分も説明してくれたことは、私の日本研究の第一歩になったといってもいいくらいです。

だから、ここに集まっている先生方、またこれからこのセンターに携わるいろいろな先生にこのお願いをしたいんです。外国人の日本語の不十分なことをあまり問題にしないで、日本語を使うとどれほど「まこと」があるかどうか、そういうことをよく考えて、協力していただきたいのです。

次は、「アジアにおける日本」というセッションに出た言葉でちよつと気になったことですが、後でそれが議論されなかったけれども、「思想発展途上国」という言葉が出ました。「発展途上国」という言葉は経済の枠組みではいわれていますが、このように思想的発展途上国という概念は私はあまりよくないと思います。どんなに経済的に遅れていても、あるいは発達していないといっても、必ずしもその国の思想の段階も遅れているということは、ちよつといえませんが。

また個人の経験になりますが、私が一番最初に日本に留学に来た時にいわれたことです。私は一九六六年に最初にまいりました。もちろん日本の文部省留学生としてまいりました。その時インドは食料危機もありまして、聞かれたことがあるんです。「サヴィトリさん、恥ずかしいんですか。あなたの国には食料危機もあるし、ここにいる間はそれは全然感じていませんね」とか、「ここにいる間によく食べてください」とか、そういうことを言われ、私は日本人ほど経済的に恵まれていないことはよく承知していますし、また、生活水準もそんなに高くないことも承知しています。だからといって、私個人としても、インド人としても、思想のレベルも遅れていて、頭を下げるようなことは何もないではないかと考えたことがあります。かといって、私はインドが優れていて日本は優れていないともいっていません。

私が思うのは、文化研究という話もいろいろ出ているから、このように文化にも身分があるとか、経済発展と同じく国々の文化としてもカテゴリー化することができるといふ考えは持たないほうがいいのではないかと思います。

インドで、梅原先生のお話を拝聴する機会がありました。先生の御発言にも出たように思想の発展は、低いところから高いところへ行くということではありません。梅原先生は多神教のことについてふれまして、一神教が一つの発展した宗教だと思ふことは間違いいではないかということをおっしゃった。思想のレベルでは、古いものは全部プリミティブだと思われることは正しくないとも指摘されました。

このところでもう一つ思い出すのは、「なぜインドでは、いろいろな緊張感が生まれる可能もなかった時代に人間の心の不安をどのようにおさめたらいいかという特有の物の考え方があったのですか」と聞かれたことがあるんです。人間の心の不安というのは、社会的、経済的構造の変更にによって多くなる、少なくなるということもあるけれども、人間の心の不安はどんな社会にもあり得る。だから、その不安をどのようにおさめ、どのように平和的にさせたらいいかということは、その社会構造とは必ずしも関係ない。しかし、日本人から見たら、そのような緊張感がない社会があった。それなのに、「ヴェーダー」の時代のインド人がなぜそういうものを考え

たかという疑問をいだくわけです。経済発展の段階として、プリミティブな時代だったのに、なぜそのような非常に優れた思想が出てきたかと考えなければならぬのですね。インドの哲学の発展は（そう言えばどんな国にも）経済発展とはかならずしも関連づけられないではないでしょうか。

最後に、先生が図式で文化と文明のことをおっしゃったのですが、一つだけ私の考えとして申し上げたい。先生はエートスのことをおっしゃったのですが、そのエートスは時代によって変わらないということはないんです。それは固定したもので、どんな時代にも同じエートスをもって人間が動いているということもいえない。だから、そのエートスを探っていくために昔の文化に戻っていった、そこで何かわかれば、それがその国のエートスだと決めつけられるでしょうか。要するに、ある国のエートスも社会構造、経済構造によって変わることもあり得る。だから、それをもって二つの文化の分類をすることには問題が出てくるのではないかと思います。

先生が、西洋の文明を取り入れた時、そのエートスは取り入れなくてもいいとおっしゃった時。西洋の文明、例えば政治のほうから見ると議会制度を日本が取り入れた時、それはどのような西洋のエートスで生まれたかということを見無視して、議会制度を機械的に取り入れる時に出てくる誤解、あるいは、そのように取り入れたことから出てきたいろいろな矛

盾も考えなければならない。要するにエートスというのはいつもある国で固定しているということはないのです。

インドに戻りますが、インド文明というのはどういふものかという、一つの固定したものではありません。いろんな流れがあるんです。伝統といってもそうなんです。例えば、多数がヒンズー教ということで、ヒンズー・トラディションといわれるのですが、インドには回教もはいつてきたし、ムスリム・トラディションということも無視することはできません。だから、インドのエートスとはどういうものか。それをなんとかして統一して、これがインドのエートスだとわからないとその文化がわからないということが、私にはちよつと認めがたいのです。

日本も多様性がないといわれても、私のほうから見ると多様性があります。あまりにもリジド rigid になって一つのエートスをつかまえようとか、これは日本人だとか、これは日本の文化だとかいうような試みをしないほうがいいのではないかと。もっとフレキシブルになって理解し合ったほうがよいのではないかと思います。

というのは、日本人がインドを見る時、このような試みをするからです。例えば「何がインド的ですか。何がインドのエートスですか。何がインド人……」。そのタイプをつくるのはむずかしいですね。もちろん、インドは広くて、私は南出

身で、デリーに住んでいて、私の考え方もいろいろ変わっているかもしれませんが、いま「外国人の代表」といわれましたが、私は必ずしもインドの典型的なタイプかという、絶対そうだと断言できません。だからそのような試みは必要ないと思います。もちろん、学問的にはタイポロジーは必要になるかもしれませんが、あまりにもそれをすると思うと単純になってしまって、多様性の美しさが理解できなくなってしまうのではないかと。それを避けたほうがいいのではないかと思います。

日米の貿易摩擦というようなことも出ましたが、文化が違うから出てくる摩擦と。私は、伊東先生が「普遍的なことというのとは人間ではないか」とおっしゃったことは非常にいいことだと思えますけれども、私たちは、このセンターを通して、あるいはいろいろな研究をすることによって（毎日自分にもいつていますが）ほかの文化、ほかの民衆を見る時、偏見を持たないこと。地理的な条件もありますし、いろいろな条件もありますから、そこから出てくる文化のことを理解しようということ。自分の価値観をほかの文化に押しつけようとしないうことです。

それがいつ出てくるかというと、特に日本の場合は、経済

的に成功しましたから、そこにあるいろいろな価値観が少なくとも経済的な成功をもたらすのではないかとというような前提に立って他の文化を評価するようになります。私たちが外国から見るとそれを避けたほうがいいと思います。経済的發展も一つの価値観になりますが、もっといろいろありますから、それも勉強しましょう。

日本人も、スーパーマンのように見えますけれども、人間ですから、共通性がたくさんあるということ。私が日本を見ようとした時に前提に置いたのは、この間もいいましたが、異質文化ということではなくて、同じ人間で、いろいろな歴史的なことがあったけれども、それはどういう環境があつて起こったということをよく認識し、それによってクロダシロだということを決めつけないで、中にあるグレーのところも見ていこうということ。私たちは自分の目標にしなければならぬと思います。お互いに人間の普遍性という前提に立って物を見ると、もっと理解しやすいのではないかと私は考えます。

あまりまとまらない話になってしまって申しわけないのですが、以上です。どうもありがとうございました。

上山 どうもありがとうございました。

おふたりで総括の観点から問題提起をしていただきました。いまヴィシユワナタンさんから、日本語は不得意だとおっしゃりながら、非常に明晰で迫力のあるご提案をいただきました。私たちもヴィシユワナタンさんぐらいに英語が操れて、両方まぜながら討論できれば一番いいんじゃないかと思って伺いました。

まず、伊東さんのほうからは四つ問題点が出されました。自国研究と異国研究の関係が一つ。伝統と近代。伝統と変革。それから文化と文明。ヴィシユワナタンさんからは、いろんなご意見がございましたが、いまお聞きのとおりで、まとめる必要もないと思います。一時間ほどフリートークングをお願いいたします。

モーラン 実は僕の責任でしたね、思想発展途上国。それに対して自分の考え方をもうちょっと詳しく説明したほうがいいんじゃないかと思うのです。ちょっと誤解されましたので。

その前に、伊東先生の話の中では、私は誤解したかもしれないけれど、イデオロギー的なところをちょっと軽く見ているのではないかわざる得ない。例えば柳宗悦とウィリアム・モリスの例を挙げたら、それは関係があつたかなかったか、関係ないじゃないかという話をなさったのですが、私が主張しなかったのは、日本の中では柳宗悦の民芸の考え方は完全に独特な考え方だと民芸の人たちや日本人がいつも主張していますから、その辺はすごくイデオロギー的ではないかということです。その辺は、納得しないと話にならんと私は思わざるを得ない。そして、国際化はならないです。

「思想発展途上国」はちょっと間違つたフレーズですね。私がいいたかったのは、経済学のほうから見たいわゆる後進国。ひょっとしたら同じような思想のイデオロギーをもたらずののではないかと示唆したかったのです。このイデオロギーは、日本の場合には東洋主義に深い関係があつて、このごろ日本は経済大国になるにつれて、逆東洋主義を発表するようになってき

た。それは新ジャパニズムというか、どういう言葉を使うかは別として、イデオロギーが出ます。

東南アジアのいわゆる発展途上国が将来、日本の逆東洋主義に対してどのようなイデオロギーを生むか、大変興味を持っています。日本が減じる時に、例えば東南アジア、ひょっとしたらインド、ひょっとしたらアフリカ、ひょっとしたら……、その中の経済大国になる国は必ず新しいイデオロギーを出すのではないかと思う。そのイデオロギーは必ず世界の中から生まれるイデオロギー。結局、世界の中とはいっても、日本は一番大きな経済大国ですから、日本に対しての新しいイデオロギーが生まれる。

そういう意味で私は「思想発展途上国」といったのですが、それは私の日本語の下手なところではないかと思うのですか、経済と思想とスーパーストラクチャーとインフラストラクチャーのつながりはいつまでもあるのではないかと思わざるを得ません。

上山 ヴィシユワナタンさん、いまの答え、よろしいですか。
ウシユワナタン はい、よろしいです。

伊東 僕はモーランさんの云われたことにまったく賛成なわけです。私はきょうはモーランさんの発表についてメンションしなかったけれど、大変興味深く拝聴しました。

また、モーランさんはいろいろなところで非常に率直にたくさんいいことを発言してくださつたと思うのです。外国人の中で一番は発言が多かつたのではないのでしょうか。せっかく外国から来られた方は、どうかひとつモーランさんぐらいにどんだん日本人と同じように発言してくださることで我々には大変ありがたいので、その点はモーランさんを見習っていただきたいと、僭越ながら思います。

「思想発展途上国」のことにについてはヴィシユワナタンさんがちょっと誤解されたというのが僕の率直な感じですが。モーランさんのいいたいことは、やはりそこだったのです。

その場合、気をつけないといけないことがあると思います。つまり、い

ま日本は経済的な成長をしたために、えてしてそれが、日本中心的などうか、ヤマトイズムというか、そういうものになっていく危険があるとすれば、その点は十分気をつけて、そして、本当の意味で世界の中の日本——日本が余裕を持ってきたことがどんなふうに世界に役立ち得るのかということを、もっと無私になって考えていく。そういう新しい日本研究の歩みを始めなければいけないので、我々がそれからどういう方向に向けていくかということはこのセンターにとっても重要な課題でありますから、とてもいい忠告をされたと思います。

ウィリアム・モリスと柳宗悦については、私は民芸館の方々のいい方がもし本当だとすれば、それはいささか偏狭にすぎないか、偏狭といっているわけなんですよ。「影響を受けたら受けたでいいじゃないか。それを率直に認めましょう。どうして認めないのですか。それがつまらない日本中心主義じゃないですか」と云っているのです。日本の文化というのは外からいろんなものを受けとっています。

だからいま少しでもお返しをしなきゃいけないんです、いろんな国に。日本は経済的には大国になって、いろんなところにお金を貸しているかもしれない。しかし、文化的には大赤字の借財国です。かつては中国からもらい、朝鮮からももらい、ヨーロッパからももらい、インドからもはるばるいろいろなものを頂いているんです。いろんなものを頂いて、自分自身を豊かにしてきた。そのことを肝に銘じて、もしも我々がほかの国に対していささかでもお返しをすることができるとしたら。日本歴史にとって初めてのチャンスだと思えますよ。日本の歴史にはいまだにこういう機会がありません。どういうふうに文化的借財を返していくかということですね。これをやるべきであって、変なナショナリズムなんかはその時に出てくるのは、非常に警戒すべきことだと思います。

ですから、私はむしろ国際的な方向に向いているわけなんですよ。この点はモーランさんは僕の発言をちょっと誤解されたんじゃないかと思えます。そうした影響は認めて、それにもかかわらず柳は柳で独自のものを

くったんだと云っているわけです。影響を受けているけれども、受けっぱなしじゃなくて、それを自分の文化の懷に入れて、自分の土壌で再解釈し、再構成し、新しいものにつくり上げていった。そして今度は人のためにもなるものをつくり上げてゆく。こういうことをやっていかなければいけないということをお願いいたします。ですから、僕とモーランさんは本質的に云ってあまり意見の違いはないと思います。

上野 伊東さんが自国研究と異国研究の違いを強調なさったり、ヴィシュワナタンさんが日本人と外国人というふうに区別をおっしゃるたびに、私は非常に違和感を感じながら聞いてまいりました。ヴィシュワナタンさんは日本人が多様だということにおっしゃいましたが、そのとおり、日本人による日本研究も多様ですし、外国人による外国研究も多様です。

私がブレイメンさんの報告に対してコメントをいたしました時に、ブレイメンさんが外国人の日本研究を取り上げて、「これらの共通点は外から見ただ日本です」というふうにおっしゃった時に一言いわずおれなかったのは、外国人の日本研究が必ずしも外から見た日本だということにならないと同じように、日本人の日本研究が必ずしも内から見た日本だということにはなりません。私とその発言をしましたセッシヨンの後で、韓国からいらした金春美さんが私に個人的に話してくださったコメントですが、「そういう意味では、内からとか外からとかいう区別が次第に無意味になってきたのではないか」とおっしゃったことが大変印象的でした。

そういう意味では、日本人による日本研究と外国人による日本研究の違いよりは、むしろどういうディフシプリンをその人が持っているか、どういう立場を持っているかという違いのほうが大きくなってきているような気がいたします。そういう意味で、私は社会人類学の立場に立っていらっしゃるモーランさんの方法論により親近感をおぼえるという、そういう立場にいます。例えば民俗学でも、波平恵美子さんのような方が日本人として日本研究をやっていらっしゃいますが、彼女が日本の民俗学にあれほどのインパクトを持ち込むことができたのは、何を隠そう、彼女はテキサス

でフオークロア・スタディーズを修めたからこそでありました。そういう意味では、日本的な立場あるいは日本主義を日本人が担い手になるとばかりもいえない場合があります。

モーランさんは「逆東洋主義」という言葉をお使いになりましたが、もちろんこれはエドワード・サイードの「オリエンタリズム」を意識しているのだと思います。日本人の中にある逆オリエンタリズムは、実は日本人よりももっと純粋な形でしばしば例えばアメリカ人の中に保持されている場合もあります。例えば、禅が大好きで、合気道をやっていて、京都の暖房もない町家に冬場に住んで、「これが日本の原点だ。町家を近代風に改造して住むような日本人は墮落した」といつているアメリカ人がより純粋な逆オリエンタリストであるという場合もありまして、私どもはこれを見て辟易するわけです。

そういう純化された逆オリエンタリズムを今度は日本人がどう受けとめるかという問題も次に出てくるわけですから、そういう形での日本人の日本研究と外国人の日本研究の違いを明確に区別する基準が揺らいできているのではないかとというふうに一言申し上げたいと思います。

キム・レーホ それに関連していいことがあります。

このたびの国際集会において方法論の問題が重要視されたことは当然のことと思います、とても有益な討論会だと思っておりました。この方法論の問題を取り扱うにあたって、外から見た日本、内から見た日本ということを強調して、毎日、内から見た日本、外から見た日本ということを聞きましたが、私の考えでは、現在の国際的学術水準としては、むしろ外から見た日本と内から見た日本を総合した第三の方法がもっとも現代的な水準の方法ではないかと思っています。

内から見た日本と外から見た日本の研究を総合するためには、お互いの情報の交換が絶対的に必要だと思うのです。私たちは日本の研究をしているので、日本語ができるし、日本の文を読みますが、私たちが国に帰って日本の研究の論文を書く場合には、その国の言葉で書きますので、私たち

の研究が日本の研究者たちの研究に役立つためには、外国語で書いた研究論文が日本語に訳されるか訳されないか、そういう問題が起こってくると思います。

私は早稲田大学の出版部で出した『海外における日本文学研究』と『海外における川端康成文学の研究』という二冊を読みました。こういう手段もいいのではないかとおっしゃりますが、このたびの国際日本文化研究センターがこういう学術情報の交換において中心的な役割をすることができないのではないかと、このセンターの活動にとっても期待をかけております。

これが私たちが話をする最後の機会だと思いたすのでうちよつと時間を下さい。

「国際日本文化研究センター」の名称に「日本」という言葉が必要であるか、そういう意味の発言がありました。私は、日本中心主義と日本問題の研究を科学的ベースに乗せることは別な問題のように思われます。「国際日本文化研究センター」という名称に私は違和感を感じません。

学術シンポジウムはこれからも続けられると思いますので、一つの意見を申し上げたいと思います。

まず、三日間の討論会がありました。私は報告の時間を四五分も取る必要はないのではないかと思います。報告者はレポートの内容をテーゼの形で、プリントして配りましたので、四五分をむしろ討論の時間に回したら、もっと有効ではなかったかと思えます。女性の解放の問題がありましたが、討論の時間がなかったのは、残念でした。また、日本文化と現代これはアジア諸国の文学にとっても非常に興味のある問題と思いますが、時間が少ないので、具体的な討論ができなかったのではないかと考えております。

最後に一つの要望をのべて下さい。ソ連では日本を研究する人たちを全部集めると一〇〇人以上います。ソ連の日本研究者と国際文化研究センターでシンポジウムをつくることのできるのではないかと思います。そ

いうことについてどうお考えになりますか。ちょっと質問したいと思っています。

上山 いまのご質問に答えていただけますか。

梅原 後でまとめて。

ツルタ ヴィシュワナタンさんの発言の中に大変重要なことが含まれていると思います。それは日本人の研究者ないしは日本人の考えの押しつけはまっぴらごめんだというポイントです。それとパラレルに、伊東先生のご発言の中に「日本という国は過去、いろいろな国からいろんな恩恵をいただってきた。我々はもらいっぱなしである。したがってそのお返しをしなければならぬ」というご発言がございました。

この二つは非常に危険な関係をはらんでいるのではないかと思うのです。伊東先生ははじめそういう考えを持っている方は、何をこれから世界にお返しになりたいのかということなんです。これが逆オリエンタリズムにならないかと思っています。

それから、ヴィシュワナタンさんのご発言にもありましたように、文化すなわちエトスというのはステールなものではない、絶えず変化しているものだと、それをつかまえる作業の不毛さを指摘なさいました。それは確かにそうであります。

しかし、そういうことはよくわかった上でなおかつ申し上げたいのですが、日本研究でも、なにかそのエトスという河の中心の周辺を我々はぐるぐる回っているような作業もあるのです。その対象を見きわめるといことは実に重要なことだと思のです。もちろん流動したものだということをよくわかった上で、それを見極めていくことは必要ではないか。

伊東先生がもしよろしければ、日本はこれから何をお返しするかということについておたずねしたいと思います。

伊東 まずいま、内からの日本研究と外からの日本研究とはあまり差別がないんじゃないかとおっしゃった。ある意味では確かにそうかも知れませんが、おっしゃることはわかりますが、それにもかかわらず、現実にはやは

りこの違いは依然としてあると思うし、またあつてよいと思うのです。しかし、この問題はあまり深入りしないようにいたしましょう。上野さんと個人的に議論することにして。

内からの日本研究と外からの日本研究、これが総合されなければならないのだ。それで日本というものが本当に世界の中で見えてくることになるのだ——これは日本研究だけではなく、ほかの文化の研究も内からと外からが統合されなければならないのですが——そういう統合をやらなければいけないというキムさんの発言の方に私としては賛成で、私もそういうことをいいたいわけです。両方必要で、それが対話を通して総合されなければならない。そうすると、日本というものの、全体がうまく見えてくるんじゃないか。変に夜郎自大でもなく、卑屈偏狭でもない日本が見えてくるのだらうと思うのです。

そういうチャンスを与えるのがこのセンターの目的ですね。そういうことをいまやっているということ、これが私の云うお返しの一つになると思うんです。つまり、経済的な余裕ができて、ファンドができて、現に我々はいまこういうことをやって内と外とを統合を試みている。こういうことをやっていること自体が借財を返しているのではないかと思うのです。外国の人もたくさん呼んで、外国の人の研究にもいろんな便宜を提供して、外からの学問的要求にもおこたえしていく。これはやはり借金を返しているんじゃないでしょうか。

ツルタ それはどちらかというと経済的なものであつて、その点は賛成ですが、私が伊東先生の発言を解釈したのは、よそ様からいろいろな文化的なものをいただいたということですね。じゃ、日本の方々は、外国にどういう日本のものをお返しするのか。向こうからこういう文化をもらった、だからこちらもちょうど文化をお返ししなきゃならないと思うのだとすると、大変危険な感じが私にはするのです。

しかし日本の文化の中にある要素があつて、それが世界のためになる、だからそういうものをもちよつと見ていただいて、できたらとり入れて

もりたいというようなことなんでしょうか。

伊東 それは私が答えるというよりも、それぞれの日本人が考えていかなきゃならないと思うので、私とその答えを独占する資格はないわけです。

しかし、いまは私に質問されたのだから、私の責任の範囲で、そして私の思うものを述べるよりほかはないと思いますが、私はこんなふうに思います。

日本というのはいろんな国の文化を受容した。そして、比較的融和的な文明をつくってきたと思います。つまり、いろんな文明が雑居して、どこかが一元的にこれでいけといったようななんとか中心主義とほど遠いものをつくってきた。今日地球はそういういろんな文化の多元性を認めて、その相対的価値を公平に見ながら、かつ、それが相互に交流して新しい諸文明をつくっていくという時代だと思うのです。

そういう時にそういう文化研究のモデルをどのように考えるべきかということが問題となり、私自身は先ほど申し上げたようなモデルを出しているのですが、それがまさにそうなんです。これは一種の文化相対主義ですね。西洋一元論でもなければ、日本一元論でもなく、中国一元論でもなく、インド一元論でもない。それぞれがそれぞれの価値を持った文化だということを確認した上で、その文明的装置をすり合わせていくことによって、やがて地球的なシビリゼーションがつけられていくだろうという展望を持つのは、実は僕が意外とそういう日本の文化の中にあって考えているからかなと、思ったりしています。

日本文化のなかで育ってきた考え方なり感じ方なりを、今後国際会議でもなんでも率直に発表していつて、そういうことで何か世界にも貢献できるものがあるのではないかと私は考えております。

森岡 私自身の考えとしては、伊東さんが黒板に出されたモデルは、伊東さん自身が世界にお返しすればいいことであって、伊東さんが日本人として世界にお返しする必要はないのではないというのが、私の直観的な解答です。

この点是非常に微妙で、瑣末な問題に見えるかもしれませんが、私の感性の上では非常に大きな問題です。上野千鶴子さんが、内から見た日本外から見た日本という見方はだんだん意味をなさなくなるのではないかという見方を出されましたが、私もまったくそのように感じるので。

例えば日本文化研究をする時に「日本人はこうすべきだ」というようなフレーズをどのぐらい頻繁に使うかを調査しても面白いですね。同じ日本国籍の者が議論してもこの点ではかなり多様性が出てくると思います。そういう意味で、ひょっとして例えば私と伊東さんとの間の差異のほうが、私とモーランさんとの差異より大きいかもしれないと感じるわけです。同じ日本国籍人でも世代間の差異というものの存在を考えざるを得ない、というところまで私は今日感じてしまいました。

上垣外 私、「借りを返す」といういい方で思いつくのは、日本人は韓国へ行きますと、非常にたくさんおごられるんです。ここにいらっしやる金春美さんにはたくさんおごってもらいました。日本人はこれを非常に負担に思っています。たくさんおごられたから、その分おごり返さなければいけないと感ずるのです。僕はこの感覚から抜け出るのに大変苦労いたしました。で、私は、あんまりそういうことは気にしないほうがいいと。向こうが、たくさんおごって、ああ損したと思うなら、そのうち嫌になってやめると思っています。

私は文明と文化は多少分けて考えたほうがいいと考えている者なんです。それは、物と心を分けるのはまったく古くさい分け方だとは思いますが、やはり意味はあると思います。

私の個人的なことを申し上げると、私、西洋の音楽が大好きです。特にドイツの音楽が好きでして、一日にテレビを何時間見るといふ人がいるかもしれませんが、私はもしかすると二、三時間、ドイツを含めてフランスとかヨーロッパの音楽を聴いているかもしれないません。私はヨーロッパの音楽からものすごく豊かなものをもらったと思っています。

それはテレビを買うとかお金をもらったというのとはちょっと違うと思う

のです。つまり、物だったら空間を占拠しますから、日本製のテレビとアメリカ製のテレビを私の部屋に置くかという、三つも四つ置くわけじゃない、一つしか置けないんですから、日本製を置けば、アメリカのものは置けないですね。アメリカ製のテレビを買えば、日本のものは買えない。文化はそうじゃないと思うのです。私はたまたまヨーロッパの音楽が大好きなので、ヨーロッパの音楽ばかり聴いていますが——インドの音楽も好きです。この二つが大好きなんです。あまりインドのは聴いていませんけれども——たまたま日本の音楽が好きになったら、やはり聴けるんです。時間の制約が多少ありますが。精神的なものは物がトレード・オフの関係にあるようなトレード・オフの関係にはないということです。

「そういう精神的なものを私、たくさんもらいましたから、じゃ返しなう」と。これも、物を返すように返すのじゃなくて、例えば皆さんがきのうエクスカッションで笛の演奏をお聴きになりました。我々はある意味でこれを押しましたね。そうじゃなくて、ああいうものを皆さんが自発的に自然にお好きになってくれれば、それでいい。どれがいいかわからないですね。けれども、率直にいいですと、西洋のすばらしい芸術作品を日本人が読んで感動し、心を豊かにしてきたのに対して、日本——日本で区切りなくありませんが、やはり私にもナシヨナリズムがありますから——の中で生まれた芸術作品が、日本人がベートーベンなんかを聴いて感動するような程度に味わわれてはいなかったと思います。

日本にも確かにいいものがありました。あつたけれども、だから川端を西洋人が読まないのはけしからんのでしょうか。僕は嫌だったら読まなくてもいいと思うんです。向こうの方々がわからないのは、僕は向こうの方が損じゃないかと思うんです。本当によかったら。だから、いいと思つたらどうぞお聴きください。私は川端が読めて、プルーストが読めます。私、フランス語は下手ですが、まあ読めます。もし西洋の人が日本語ができて、川端がよくわからないのなら、その人たちは損していると思います。でも、その人たちが損してもいいと思うんだったら、僕はそれでもいい。

だけどいつかは気がついて、得をしたいというふうになって、自然に広がっていつてほしいと思います。広がらない疎外要件はいっぱいありますから、それを取り除くことは必要ですが、押しつけはなるたけしたくない。きのうは精進料理と天竜寺と笛を押しつけさせていただきましたが、私はああいうことはあまり好きではありません。いつか政治家が「声なき声」といいました。皆さんのご希望を聞いたわけではないのですが、いわずともきつと求められているだろうというものを私たちは差し上げたつもりではあります。違っていたら、申しわけないと思います。

金 私たちが初めここに集まった時に、国際日本文化研究センターという名前の中の「日本」という言葉をなくしたほうがいいんじゃないかという話が出たんです。私個人としては貴センターは日本をほかの国と比較して、日本の特色とかそういうものを浮上させる。そういう目的もその一環として持っていると思うので、それはそれでいいんじゃないかと思いましたが。むしろ「国際」という言葉をつけるのでしたら、より普遍的であつてほしいという面がございまして例えばきょうの上野千鶴子さんの「女性に見る近代と脱近代」とか「女性の変貌」、村上先生の「産業社会の形成」などは、私がきょう聞いた限りでは、その前に「日本」に於けるというような限定をしたほうがよかったのではないかと思いますので、その点を話したいと思います。

「女性に見る近代と脱近代」という問題に関して上野さんが発表なさいましたが、きつとインドとかシンポールから、またブラジルから来た方も同感だろうと思いますが、あまりにもうちの実情とかかけ離れている。それは日本の実情なんですね。それを取り上げられていらつしやるので、むしろ発言することがはばかれるほどの格差を感じました。

さつきロリンさんが村上先生の発言に対して、いままでお使いになっている用語は欧米化された概念のものであつて、今回新しく開発される国の存在が浮上すればするほど、新しい用語に対するニーズがあるのじゃないかというふうなことをおっしゃつたと、確かじゃないが、私、覚えてお

ります。

女性問題、女性史を取り扱うにしても、本当にグローバルな観点から取り扱うのだったら、これは一つの提案ですが、例えばいま私たちが使っている「近代」とか「脱近代」とか「反近代」という語彙は全部、男性中心の社会が伝統的に男性的概念によってつくり上げた言葉であって、初めから手あかのついた言葉でもって新しい概念による解放とかそういうものはいち始めて、果たしてそれがどれくらいいい結論が出るかというのは問題だと思ふのです。ですから、言葉ですね、語彙それ自体に対する懷疑から徹底的に始めないといけないんじゃないか。私も個人的にそういう考えを持っております。

村上先生が日本の産業社会の発展とか、経済大国としての日本の発展を説明する過程で、日本の中間集団とか手工業の存在が浮上されましたけれども、これは本当に個人的な感想なんです、ほかの国との対照、比較をなさると、ほかの国にはそういうものがなかったからいま後進国になっているのではないかというふうにも誤解されやすいんじゃないかと思ひます。私は、韓国の名前が何度も出てきましたので、相当引かかっていたんです。これは本当に心情的なもので、悪いとは思ふのですけれども……。

もう一つは、初めに梅原先生からごあいさつの言葉がありました時に、「傲慢にならないように」という言葉があったと記憶しています。それで私はハツとして、ああ日本は経済大国になって傲慢になったのかな、それでああいうふうにご自身警戒なさっているのかなというふうにも最初、とったんです。そういう意味ではないと思ひますけれども。

確かに、日本は経済大国になったから、これまでの日本のあり方を全部見直して、それが全部プラスであった、全部よかったから結局こういう結果になった、とそれを結びつけるのは、結果としてそうでありますから、当然一つの方向としては正しいと言えましようけれども、あまりそういうふうな全面的に肯定するのは、私としてはどうかと思ひます。すみません。なにかとりとめのないことを話しまして。

ロコバント 二つの点を申し上げたいのですが。

一つは、さっき上垣外さんがいわれました文化を返すとかいうことなんです、返す必要はないと思ひます。なぜならば、もらったことはないからです。したがって恩返しする必要もない。

といいますのは、たとえばドイツは一生懸命ゲートを日本語に訳して輸出したわけではなくて、日本人が一生懸命ドイツ語を習ってそれを読むようになり、自分で翻訳して、普及させたわけです。また、制度づくりの場合、高いお金を出して、すべての国からそれぞれの分野の一番優秀な専門家を呼んでしばらく働かせて、勉強した。努力はまったく日本側にあつての勉強の成果だと思ひます。

今度は我々の番です。日本の文化・制度等を知る価値があると我々が思うのなら僕らは自分で勉強する義務があると思ひます。その場合に手伝っていたらなければありがたいのです。しかし、恩返しという感覚は僕にはゼロですね。

ちなみに、きのうの笛と精進料理は押しつけではなく、非常においしくいただきました。

二番目は方法論に戻りたいのですが、先ほどキム先生から、外国人の日本研究の業績を日本語に訳してほしいというお話があったのですが、僕もそれは強く希望しています。日本のことを勉強する日本の研究者が——今日、ここで集まった先生方の様な例外もありますが——しばしば外国語が読めないということもありますし、外国語といっても、英語だけではなく、フランス語、ロシア語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語もありますから、全部マスターすることは不可能です。そうしますと、両方にとって有意義な、本当の意味での対話を可能にする前提として、やはり逆翻訳が必要になるのではないかと思ひます。

しかし、一つ注意すべき点があります。その書き方は方向によってまったく違うからです。僕がドイツ人のために書く場合、また日本人のために書く場合、ドイツ語で書くか日本語で書くか、これはまったく違うもので

あって、論の立て方もそうですし、入れるファクトの数、その説明等も、そうです。「明治」と書けば、ドイツ語ならば「一八六八年から……」と書くし、日本語訳の際、それを省略しなければいけない。このようなことは軽視すべきではないと思います。注意してもらいたい点としていっておきたかったです。

濱口 本日の伊東さんの総括は日本研究の方法論を中心に総括すると最初におっしゃいましたので、元の問題に戻りたいと思います。

伊東さんの総括では、伝統と近代化、伝統と革新、文化と文明というふうな二元的な対立を、対立しないもの、相即的なもの、相関的なもの、関連あるものというふうにとらえ直す、そういう報告が多かったと総括なさったと思うのです。それは確かに一つのダイナミックな分析の方向性を示していると思うのですが、もう一つは、外国からおいでになった先生方が日本人の発表に対してコメントなされて、どうも日本人独自のアプローチだとか概念に欠けているという指摘をなさったことが多かったわけです。

そうしますと、二元的な対立概念をもう少し柔軟に相關させて眺めていくという方向で、日本人独自のアプローチの仕方の特徴づけていいということで満足なさるのかどうかを、外国人の研究者の方々にむしろ伺いたいと思うのです。リディーン先生などは特に、発表に対して日本人独自のものがないとコメントなさったわけですが、伊東さんのとらえ方でご満足なさるかどうかを伺いたいんです。

リディーン 私の意見はいろいろあるけれども、あらわしたくない。大体賛成しています。

セイズレー 伊東先生のお考え方は、ちょっと誤解したかもしれないのですが、外核の文明と文化の内核の区別は私にとってちょっと理解しにくいと思います。日本歴史は、その歴史的な過程の中では、外国、例えば中国大陸とか西洋から文明の面においていろいろなことを導入したわけですが、これは文明だけじゃないと思います。文化にも影響を与えたんじゃないですか。そう思います。

それから、こういう図式は、日本のことについて適用する場合は……、文明と文化の違いは、政治的な面では国体と政体との区別に似ているんじゃないでしょうか。つまり、文明は変わっても、文化はそのまに残っている。政体は変わっても、国体はいつまでも残っているというような印象を受けました。

ですから、文化は日本的なもの、日本らしさにつながりやすいんじゃないですか。つまり、日本文化というものは外国の文化を取り入れて、そういう過程の中で生まれてきたと思います。日本文化らしさはどういうところにあるかという問題が出てきまして、日本らしさは弥生時代までさかのばらないとわからないですね。その時代の日本らしさはどういうものだったか、さっぱりわからないでしょう。ですから、文化とか文明のはつきりしすぎた区別はちょっと危険な考え方じゃないかと思います。

上山 だんだん重大な問題提起がでてきたわけで、ここから数時間議論しなくなりませんが、そろそろ限られた時間がまいりました。

最後に、この所長の梅原さんに、管理責任者の立場にありますから、感想を、できれば抱負なども含めて締めくくりをしていただきたいと思います。

梅原 皆さん遠いところから来ていただきまして、五日にわたる議論をしていただきまして、ありがとうございます。

昨年も行ったわけですが、私が聞いていまして、昨年よりも議論が深められたと思うのです。昨年より密度の高い議論が展開されたと思うのです。それは必ずしも議論が一致したということではなくして、意見が分かれた、あるいは、なかなかお互いの考え方がよくわからないということを理解させたかもしれませんが、とにかくいろいろなことを我々は教えられた。外国の研究者の方からいろいろなことを気づかせられたということもあります。また、日本人同士で、私も国際日本文化研究センターの教員ですが、なかなかお互いの考え方を聞くチャンスがありません。そういう意味でも大変ありがたかったと思います。

私はお伺いしてまいってつくづく日本研究は違った時代がやってきたと。先ほど、日本人だ、外国人だという区別は要らないという議論がございました。きのうもエクスカッションで、タイラー先生に天竜寺の説明をしていただいた。最初、多少の違和感があつたわけですが、考えてみれば、タイラーさんのような国際的にたくさんの建築を見ている方が天竜寺を説明したほうが、日本人にもよりわかる時代が来ていると私は思いました。日本研究が世界の人のものになってきたというような印象を受けます。

このセンターができました由来につきまして、いろいろ苦労してつくってきたわけございまして、特に議長をしておられる上山先生には、桑原先生とともに大変ご苦労をいただきました。この両先生がなかったらとてもできなかった。その間にいろいろ苦労がございましたが、私はこの議論を聞いて、やっぱりつくってよかったと思っています。

これは日本研究を世界の人のものにする機関でございまして、決して日本人の主観を押しける気はさらさらございません。私はいままでの日本研究は、右翼はもちろん左翼も、日本人のみの研究に終始したと思います。それによって思いがけない視野、研究が生まれることを妨げていたという感じがいたします。

国際日本文化研究センターはまだ試行錯誤でございまして、手探りでございしますが、国際的な総合的な日本の共同研究というのが主題でございすから、それを有効にご利用なさっていただきたいと思っています。

我々は共同研究を三年続けるのです。四年目に国際集會という形になりまして、再来年度からは共同研究の結果を国際集會にするというふうになっていくわけでございます。

共同研究につきまして、共同研究には必ず外国人に参加していただくことになっております。皆さんは今度は国際研究集會に出席されたのですが、どうか共同研究にも参加していただきたい。全部すぐに皆さんの希望に応ずるかどうかわかりませんが、できるだけそういうふうにして、将来

の計画を立てたいと思います。

三年間共同研究をして、四年目にこういう形でまとめるといことになりませんが、皆さん主任教授クラスの方々は一年以上も職場を離れることはできないという現状だと思いますから、半年なり一年なり参加していただきまして、その間の研究の情報はお知らせいたしますので、またこうして集會を開いて、最後にまとめます。

そのまとめめる議論は、私は一つ一つの結論ではなくて結構だと思うのです。一つの仮説に向かって挑戦するのは結構でございますか、その仮説に賛成する人も反対する人もいていい。反対する人がいることによって、その仮説はもっと厳しい仮説になることができると思います。

共同研究は日本語だけでやるべきかと、英語は現在世界語だとすると、英語でもすべきではないかと私どもは考えています。教員の数だけ共同研究があるわけでございますが、将来、一本か二本は英語の研究をやる。国際日本文化研究センターのメンバーの中心は日本語ができる日本研究者ですが、もう一つは、日本語はできないけれど、日本に対して重大な関心を持っていて、それを学問のテーマとして考えている人がいる。こうした人も利用できるように、英語の共同研究も将来のプランとして考えているわけでございます。

もう一つは、ここは情報を持ちたいということとございまして、いま情報の設備をつくっているわけでございます。例えていうと、世界のドクター論文の情報を教えてくれとか、そういう要求がいろいろまいてくるわけでございますし、世界の日本研究の概要を知らせてくれと。これこそ我々のところの義務でございまして、そういうことにおこたえする情報設備を考えております。そのために、皆さんのところの研究成果も我々のところへ寄せていただければありがたいと思います。

最後に、いろいろなことが出ておりまして、国際的な総合的な日本研究は一体どういう意味を持っているのかというご異義がございました。これはセンター共通の意見ではございません。私のそれに対する考え方をいい

たいと思います。

私は、センターの研究は、いままでの日本研究と違って、日本だけで日本を見るのではなく、世界の中で日本を見る。ここで徹底して比較と関係重視する。いままで比較と申しますと、ヨーロッパとの比較が主であったのですが、ヨーロッパとの比較だけではだめだろう。非常にむずかしいのですが、中国や韓国や東南アジアやアラブや、そういうところとの比較も行わなくてはならない。大変困難な課題ですか、私は徹底した比較と関係を通じて日本を研究すべき時だと思っています。大変不完全ではありますが、そういう方向で研究を進めているわけでございます。

にもかかわらず、まだ日本研究はどういう意味を持つのかというお考えがあるかと思っています。私の考え方はこういうことでございます。

人類はまだ世界的思想を持っていないんじゃないか。いままではヨーロッパが非常に優れた学問を生み出し、いろんなモデルをつくったけれど、それは無意識のうちにヨーロッパのモデルを普遍化しているのではないだろうかと思うのです。例えばマルクスの説でも、マックス・ウェーバーの説でも、それは普遍的な説であるよりは、やはりヨーロッパ的モデルに負っている。多神教はポリミティクな宗教で、一神教が宗教の最高の発展段階だという思想を従来のヨーロッパの宗教学は共通にとっているのです。そういうふうは無意識のうちにヨーロッパ的モデルを普遍化していたということがあると思うのです。

こういう学問ではなくて、本当にいろいろなモデルを平等に考察しながら、人類は新しいモデルをつくっていかなくちゃならないのではないかとと思うのです。そうでございますから、私のところは、日本もとるけれど、ヨーロッパもとる。できたら韓国も中国もアラブも、いろいろなモデルをとりながら、将来の普遍的な人類のあり方を研究していく。という意味をいまは持っているのじゃないか。私のところは日本を視点にとるようでありながら、研究者はほとんどヨーロッパの学問をやった人なんです。ヨーロッパと日本と少なくとも二つもモデルをとれる。その上にいろんなモデル

ルをとりながら、将来の普遍的な人類の思想を構成していく

モランさんがいうように、恐らく日本経済的な発展もそれほど長く続かないだろうと思います。けれども、新しい試みを経済的な繁栄が続いている時期にやっていくべきだと。あるいは次の時期には新しいモデルは韓国から出るかもしれない。あるいはアフリカから出るかもしれないと思うのです。だけど、文化を相対化して新しい世界のモデルをつくるという動きをすべきではないかと考えています。これは偏見かもしれませんが、私はそういうところにこのセンターの一つの思想的な営為があるのではないかと思うのです。これは私個人の考え方でございまして、センター全体の考え方はございません。

ツルタさんからこの前お話がございましたように、センターの教授は大変優れた教授が多いからと。これはほめ言葉でございますが、お世辞かもしれませんが、私は本当にそう思っているのでございます。所長がだめなものにもかかわらず、所長がだめなほど、偉い先生が集まる。真ん中はクウ（空）なほうがよろしいと思うのでございます。優れた先生に来ていただきまして、世界の日本研究と交流を深めるのは、センターの事業の一つじゃないかと思うのです。ですから、ここで講義をしてくれ、話をしてくれというあれがございましたら、センターとしてできるだけ応じたいと思うのです。

キム・レーホさんから、センターとしていろいろな機関と交流ができるのではないかということが出ましたが、センターの予算の中には含まれていませんけれど、そういう申し込みがありましたならば、いろいろな形でそういう機会をつくりたい。これも我々の義務だと思っています。

大変有益な議論をありがとうございました。

上山　これで三日間のシンポジウムの幕をとじることになるわけですが、このシンポジウムを通じて、知識とか認識の点で必ずしもプラスにはならなかったという厳しいご意見をお持ち帰りの方もあるかもしれませんが、こうやって三日間同じホテルにお泊まりになって、いろいろとお話し合い

をしたり、口喧嘩をなさった方もいらっしゃるかと思いますが、知識次元とは別のところで接触を深められる。これだけでもこの数日間には意義を持つだろう、将来性を持つだろうと思います。今後ともそういう接触をますます深めていかれるきっかけにしたいだけだと思います。

最後に、村井教授から。

村井 三日間、シンポジウム、どうもご苦勞様でございました。月曜日の国際研究集会や、火曜日の公開講演会をあわせれば、五日間ということできささかお疲れもありじゃないかと思っています。

いま議長や所長が申しましたように、今年のシンポジウムは非常に実りのあるものだったと思います。ただし、実りのあるというのは、なにも結論が出たということではないと思います。むしろ様々な疑問が出てきたことが成果だと思います。ガーストルさんがさっき、隣の人が何を考えているかわかっているはずはないんだというようなことをいわれたと思います。が、私もそう思います。共通に理解しているからこの会議をもっているのではないわけで、お互いに偏った見方、偏見を持っている、独断を持っているから、集まって意見を出し合い、議論をしていくわけです。そういう意味では、様々な形の意見で終わっても、それはそれで大変な成果だと思います。

日本の研究をしていらっしゃる外国人の方は、結局は日本の問題を通して自分の国のことを研究していらっしゃるのだらうと思います。そういう

点では、このシンポジウムの成果を、それぞれの立場において深めてくださるようをお願いしたいと思います。

所長が申しましたように、こういう形のシンポジウムは草創期の三年間のあり方でございますので、四年目からはもう少しテーマを絞った形のシンポジウムが、これは様々な形でもたれることになると思います。そういうものにも積極的に参加していただきますようお願いいたします。

こういうふうなシンポジウムですと、例えば、既に反省しているところがございますが、文学的な問題が今回は欠けていたんじゃないか、それを含めたらもうちょっと議論ができたんじゃないかというふうなことがあります。一方、去年はスケジュールがかなりハードだったものですから、今年は時間の余裕を置こうということで、きのうの午後のエクスカッションみたいなものをもうけたりしましたが、会のもち方そのものもなかなかむずかしゅうございます。こんごは、こういう経験を生かしながら、会のもち方についても真剣に考えたいと思っております。

いずれにしても、三日間ないし五日間、大変ご苦勞様でございました。またいろいろなアドバイスをいただきたいと思えます。

とりあえずシンポジウムの終わりを告げさせていただきます。

傍聴席の方も三日間ありがとうございました。

上山 どうもありがとうございました。閉会にいたします。